

山田幸男先生生誕 100 周年記念寄稿集

長谷川由雄：山田幸男先生との出会い・・・そして別れ

出会い

私は海藻の研究を志し、昭和17年4月に北海道帝国大学理学部植物学科の海藻分類学教室に籍を置くことを許された。開学10年余りを経たこの理学部は、いずれも新進気鋭の学者揃いで、海藻学を更に深く究めたいと思った私は、当時海藻分類学の世界的権威として、植物分類学講座を受け持ち精力的に研究活動しておられた、海藻学の権威山田幸男先生の門下に入ることを許された。

この年植物学科に入学したのは3名で、1人は予科から進学した倉林君と東大理学部地球物理学科で天文学を研究していた変わり種の塚本君だった。当時理学部は6学科即ち数学、物理、化学、地質鉱物、動物と植物の6学科のみで、学生も各学科10名足らずで、教授のマンツーマンの指導を受けることができた。植物学科は分類、形態、生理の3講座であり、1年目には植物分類学、植物形態学、2年目で植物生理学の講義を聴くことになった。植物分類学は動物学科の学生に

としては選択科目だったこともあり、動物の学生と一緒に講義を聴くことになった。

先生の講義が始まり、講義に出てくる術語も当時はドイツ語が多く、菌類の講義で頂いたプリントも全部ドイツ語だった。他学部から見れば、理学部は基礎科学を中心とした学科で、集まった学生たちは理科系の兵役免除特権を持ったり、検査が丙種合格で軍隊にも直接関係のなかった学生等の集まりで、第二次世界大戦の末期になっても、現在のようにアルバイトする者もなく学生生活を謳歌していた。しかし戦争もたけなわになり、年齢の多い塚本君が召集になり、植物学科の学生は2人になってしまった。夏休みには理学部の学生たちも勤労動員で、樺太の飛行場作りに出かけることになったが、既往症のあった私は免除になり、3年目に貰うことのできる大部屋の研究室のテーブルを2年目の時に貰い、卒論のテーマも「奥尻島の海藻フロラ」に決まり、先生の直接のご指導を受けることになった。



私の学生時代の先生

植物学科では一年目の夏には室蘭の海藻研究所で採集等の実習があり、2年目には厚岸の臨海実験所で実習をすることになっていた。しかし一年目の時授業が戦時下のため6ヶ月短縮になったので、早く2年目に入り、従来だと学部2年後の残り1年で卒論を仕上げるとというのが常態だったが、私の場合には幸い卒論に1年半も費やすことができた。学科の同級生の倉林君は初めから植物染色体の研究を目指していたこともあって、分類学を専攻する学生は私一人になったので、従来2年目の夏休みに実施する厚岸の臨海実習にも出かけず、先生と一緒に奥尻島採集旅行に出かけることになった。

奥尻島の採集旅行

先生は東大在学中海藻の指導を受けていた岡村金太郎博士から、先生の理学部に赴任に当たり、弟子で水産講習所出身の木下虎一郎氏が海藻を始め、浅海増殖研究を志しているので色々指導してくれるよう依頼があったとかで、当時余市にあった北海道水産試験場に在職中の同氏と交友を深めておられた。

今回の奥尻行きにあたり、同氏を通じて現地の漁業協同組合に連絡を取って頂き、滞在中の世話や案内を依頼しておられた。昭和18年8月、函館本線・江差線を乗り継いで松山江差町に一泊することになった。当時は交通も不便な時代で、奥尻へ渡る船便は早朝に一回きりなので、どうしても江差に一泊しなければならない不便さであった。この通船は30トン足らずの機帆船で、甲板上に乗せられる我々は荷物並であった。冬の採集旅行には悪天候で欠航することが再三で、江差に幾日も宿泊せざるをえなかったこともあった。

奥尻港から数分のところに、漁業組合があったが、木下氏からの依頼で組合から小山参事が出迎えてくれた。組合で挨拶もそこそこに、先生は採集の目的計画を説明された。

これ以来先生と小山氏との長いお付き合いが始まったようである。参事の自宅の側の一軒しかない宿に、休憩もそこそこに先生を残し胴乱（植物採集用具の一種）を手に、最近地震で有名になった景観の一つの鍋釣岩で採集を試みた。少し潮が引いていたので、深みまで採集することができた。その当時は磯採集といえは、ワラ草履を履いたり、運動靴を履いて岩上での活動をし易くしたり、やや深みに入るときには特長靴を履いたもので、現在のようにウェットスーツも無かった時なので、採集の範囲も限られていたので、現在のように進んだ採集方法により、従来のフロラに沢山の

種が追加されていくのは当然である。ここは比較的ポピュラーな種が多かったが、砂に基部が埋もれ綺麗な紅色の繊細なものを採集したが名前を知る由も無かった。

宿に帰り採集品を並べ先生に種名の教示をお願いしたところ、この綺麗な海藻を手にとられた先生は、一目見るなり「君これは何処で採ったのか。新種だよ」と言われたのには驚いた。後でこの種を「*Griffithsia heteroclada* オクノカザシグサ」と命名し発表した。奥尻島の海藻フロラをまとめるに際して、先生がラテン語の記載をされ共同で命名することになった。私が海藻の分類を手がけてこれが唯一無二の新種でもあった。この種のものはそう数が多いものでは無かった様で、先生の経験が一目で新種と同定されたのには、当時の私にはただただ驚くばかりで、先生は本当に偉い学者なのだなど、畏敬の念を益々深めることになった。

この島は戦前は勿論戦後も暫く一周する道路も無く、バスも無く唯歩くことであった。翌日は島の北端を目指して磯採集を試みながら出かけた。途中景色の良い宮津、勘太浜を通り稲穂岬の海栗前の宿、輪島旅館に着いた。ここは主人を戦場に送り出して女主人が一人で守っている宿であった。粗末な天井から見えた合掌作りの屋根の透き間から星空が見える始末であったが、楽しい経験であった。

私は道中採集した標本類を整理していたが、先生はブラリと外に散策に出かけられた。この辺りはアワビの産地で、足を濡らさずタイドプールのアワビを採取できるくらい豊富であった。戦後の水産研究会議等で分かったことであるが、餌の関係から大きく成長しないので、種アワビとして全国に出荷されるようになっていた。当時商品価値があまり無いので、戦前の漁師たちは生きることで資源保護の概念なんか持ち合わせていなかったとしても無理の無いことである。それでも行政では一応アワビの採取制限サイズ、採取時期について取り決めをしていた。散策から帰ってこられた先生は、開口一番「君々いまそこで漁師から鮑をご馳走になってきたよ」と大好物の鮑を食べられた先生は相好を崩しておられた。先生は無類の美食家？で多分奥様の類い稀なるお料理の腕前のせいだと思った。

なんでも禁漁期の鮑を採ったのを先生に見られ、先生の風格から道庁のお役人と思われたらしく、漁師は後ろめたさにか「一つどうですか」と差し出されたことの仔細を笑って話された。そのとき先生は「そうだ

そうだ」と言われたかどうかは聞きそびれて仕舞った。先生とご一緒に旅行している時には、こうした雅気愛すべきことが何度もあった様に記憶している。

奥尻本村に戻り、今度は山越えで西海岸に出かけることになった。今でこそ立派な横断道路もつき、温泉ホテルも建っているが、当時細い山道を2時間ほどかかり西海岸の湯の浜に着き、参事に紹介された漁民の宮川氏宅にお世話になることになった。一服して先生は近くに湧き出ている温泉を浴びに行くことになり、私は早速採集に出かけた。東海岸と異なり大きな岩がゴロゴロしていた。滑ったり転んだりして採集を続け、海水が澱んで深くなっている側壁で、赤いヌルヌルしたウミゾウメンのような小型の海藻を採集した。宿で風呂上りの先生に採集してきた種を見て頂いたところ、この種を見られた先生は即座に、「これは何処で採集したのか」と言われ、もっと沢山採集してくる様にと指示されたので、再び先程の場所を捜しに出かけたが、先に採取したひとつまみのものしか見当たらなかった。これは暖海性の珍しい種類の *Dudresnaya minima* Okam. ヒメヒビロウドであることが分かった。先生が北方海域に生育するこうした暖海性の海藻に興味をもたれていたこともあって、日本海沿岸の島々のフロラを学生達に調べさせていた。この経緯は先生の没後、ご令息が、生前先生の原稿を元にしてまとめられた「わが海藻研究五十年」に詳しく述べられている。

分類教室時代

私は昭和17年秋から19年秋までの2年間を、ホルマリンとさく葉標本の匂いのする薄暗い部屋で過ごしてきた。当時採集旅行をした時には、標本をホルマリン漬けにし、石油缶に入れて運ぶことにしていた。当時この大部屋には3年目の浜中先輩(エクトカルプスの分類)と東大卒で新婚の大学院生瀬木氏(イトグサの分類)が居るだけであった。私が教室に入るまで大部屋に君臨していた中村先輩は、入れ違いに室蘭海藻研究所に転出されていた。植物分類教室は理学部の南側に位置していたが、ニレの大樹群の枝に光が遮られ、2階の動物教室の様な良い日当たりもなかったせいでも無いが、どうも学科全体として人間関係が暗かった様であった。

先生は日に一度大部屋に来られアドバイスをされていた。昼食会は楽しいもので、田中助手の部屋に、時には大部屋に弁当持参で集まり、戦時中とあって研究談議よりは時事放談の話がはずみ一時間の休みも超過することが再三であった。戦時中ではあったけれど、

皆さん愛妻弁当を持参していた。私は自宅通学なので下宿住まいの学生と違って、不自由はしていなかった。先生の奥さんは料理がお上手で、お弁当の総菜が実にカラフルなのに日頃驚嘆していた瀬木さんが、ある日突然「先生のお弁当は実に綺麗ですね」と言われた時、先生の嬉しそうな顔は今も目に浮ぶ一齣であった。その瀬木さんもその後学位を取り、三重大の教授に職を世話され大部屋を出て行かれた。昭和18年9月に分類教室にやって来た黒木、吉田(辰男)君は間もなく学徒出陣で大部屋はまた私だけになった。私は徴兵猶予期間が1年早く満了になり、徴兵検査の結果第2補充兵になったので、この学徒出陣には召集されなかった。まさに何が幸いなのか分からないもので、引き続き先生からマンツーマンのご指導を得ることになった。

先生と水産行政との関わり

先生は日頃私たち学生に、基礎研究と行政との関わり合いが大切であることを力説されておられた。それは戦時下であったからでなく、戦前戦後を通じて先生の持論でもあった。昭和18年北海道庁より軍需資源(沃度・加里・臭素等)の海草藻の資源量(主としてスガモ・アマモ・ホンダワラ類)の調査を依頼された先生は、そのキャップとして道内在住の海藻研究者を総動員して、調査を実施され、教室にいた私もお手伝いすることになった。この詳細については前出の「わが海藻研究五十年」に詳細に述べられている。こうした水産試験場との関わりから、先生は同水試の木下氏のたつての依頼で、海藻研究者のいなかった試験場に私を卒業と同時に推薦された。先生は北海道の水産関係の戦後始まった浅海増殖事業(主力産業のコンブ等)にアドバイスを求められることが多くなってきた。

昭和22年夏に北海道の依頼で先生と動物生態学者犬飼教授と一緒に出かけた道南の離島大島の調査に私も同行した。犬飼先生はオオミズナギドリの生態を、先生は周辺の花藻フロラを調べられた。ここで初めてオオミズナギドリの巣穴を見たり、夜には鳥が海から帰ってくる状態も観察することができた。この島は旧火山だった為、岸深で磯採集は限られていた。昭和25年国立の水産研究所ができ、道より移籍した私は、海藻研究の専門家のいなかった道水試の研究員も兼務することになり、こうした変則的な状態が約10年ほど続いた。また戦後始まった水産庁補助事業である浅海増殖事業の効果調査報告会の東北・北海道ブロック会議に、先生は北海道水産部の顧問として再三私等

と共に出席して頂いた。ご一緒に頂いた会議では勿論道中、宿舎でも、諸々のお話の中に多くの感銘を受けるものが多かった。

しかし私のこうした兼務の連続では、負担がかかり過ぎることなので、道庁に専門家を採用してもらおうべく、その人選を先生とご相談し、先生は道庁水産部幹部にその内意を伝えられ、教室に助手として十数年勤務されている阪井君を推薦して頂くことになった。当初、同君は大学という国家公務員から地方公務員の試験場に移れることに難色を示していた。困られた先生は私に「今の時代はトコロテン式に助手・助教授・教授と昇任できるものでもないのです、是非説得して欲しい」と言われ、当初先生に彼を候補第一号として推薦した私にもその責任の一端も有ることなので、水産出身であり海藻分類学の専門家としての彼に、北海道水産業の発展に果してもらって役割の重要性を説き、最大限の好条件を提示し納得してもらったのは昭和37年であった。その後歴代の水産部幹部のご協力で山田教室から川嶋、田沢、辻君達が採用され、一時は5水産試験場長を阪井君と共に4人で占める時も有り、年々海藻の研究者も多く採用されるようになり、北海道の浅海増殖事業の展開に大きく貢献してきた。先生の考えておられた産学協同の精神がここに着々と成果を上げてきた。

昭和49年秋すでに退官された先生を京都の寓居にお訪ねした時、阪井君が網走水試場長から海藻研究所の中村教授の後任として転出(昭和49年)したことを申し上げたところ、先生は「道庁に採用された当時の経緯もあり、転出に当たっては事前に相談して欲しかった。彼には最後まで水産試験場で活躍してもらいたかった」と言われた。その翌昭和50年先生は京都でご逝去され、私はこれが阪井君に残された先生の遺言と受け取れたが、昭和62年阪井君が退官されてから、恒例の分類教室の忘年会の帰り道に、初めて私は彼に先生の内意を伝えた。それから2年後の平成元年、彼も他界した。もし来世が有るとするなら阪井君は先生とお会いし、その経緯をお話していることだろうと思った。

日本藻類学会の設立

昭和27年11月に先生を中心にした海藻研究者たちで、藻類学会の設立が計画され、私もその発起人の一人として末席に名を連ねた。設立に至る経緯については創刊号に詳細記載されているので略するが、その創刊号が翌昭和28年3月に第1号「藻類」として発刊さ

れた。私も研究費でこの創刊号を沢山購入し、苦しかった当時の学会の会計に協力をした。最近の学会の目覚ましい発展ぶりは、先生の遺徳を忍ばせるに充分であり、亡き先生もきっと喜んでおられることと思う。

磯焼けの研究

先生は終戦直後水産試験場木下増殖部長の案内で、日本海沿岸特に積丹半島に隣接する寿都・島牧沿岸の磯焼け地帯を視察され、石灰藻で覆われた海底をつぶさに観察され、沿岸漁業振興のために、磯焼けの主たる原因のひとつに石灰藻があることに着目した報告を出された。既に先生の2期の門下生である瀬川宗吉さんが、九州大学で石灰藻の分類学的研究をされていたし、東京教育大学下田臨海実験所で千原光雄さんも手がけておられた。先生よりご相談を受けた私は、その当時国立の水産研究所に移籍しており、本庁には若い研究者の研究に非常に理解の有った藤永調査研究部長がおり、余市に来られた機会に、一晚宿舎で石灰藻の研究の必要性を訴え理解を深めて頂いた。そのとき部長から、研究の中核になる研究者、組織形態、研究費等について意見を求められた。即座に私は先生を中心に、大学・研究所・試験場の藻類研究者がこの研究に対応できるし、漁業の衰退を憂える行政の支援協力も得られやすいことを力説した。藤永研究部長のご英断で、翌年の昭和28年水産庁の応用研究費に「沿岸における水産物増産を阻害する石灰藻繁殖防止の研究」が認められ、先生を中心とした組織作りにご協力をした。研究の実働部隊には瀬川さんを中心に進められ、私も研究に参加するかたわら予算書作りや決算書作りに先生のお手伝いをしてきた。研究の中間報告会を開くことになり、京都の植物学会の途中、千原君のお世話で下田の教育大臨海実験所に担当研究者が集合し成果の中間報告をした。第一線の藻類研究者が一堂に会したのは、多分これが初めてではなかったかと思う。

国家予算の示達は年度初めに直ぐあるわけでないが、研究は年度に関係なく継続されているものなので、先生は研究者に早く研究費をわたすべく、農林省の示達書を銀行に持参し、お金を借用して来ることにした。公文書を担保にして銀行から借り入れる経験は、先生にとってこれが初めてで最後のことだったに違いない。そこで先生が言われたことは、「銀行は預金を勧誘する時にはペコペコしているが、金を貸すという時には態度が横柄になるものだね」と述懐されていた。銀行の体質は今も昔も変わらないことと思われ

る。こうして石灰藻の研究も分類と生態研究に力点が置かれたが、1年しか研究費がないために、防止対策まで研究の手が届かずに終わったのは致し方のないことであったが、研究者の努力で大きな成果を納めた。

教授室での先生

先生のご在職中、講義のない日を選んで私はたびたび教授室に先生を訪ねた。その頃は約束もまったく取らず、先生のご都合も考えず訪ねたと記憶しているが、今にして思えば汗顔の至りであるが、先生は何時も快く迎えてくれた。初めは研究の現状で色々アドバイスをして頂いたが、話が弾んでくると話題があちらこちらに飛ぶことも再三であった。ある時には、その頃の学生気質に触れられ「昔と違って（戦前？）今学生を採集旅行に連れて行く場合でも、旅費の要求があるし、なんでも要求することばかりだ」と言われていた。私たちの時代には全部自費が建前で、標本を作る紙の果ても自費で購入したものである。借りたものは吸取紙位のものであった。先生に時代が変わったのですよと申しあげるひと幕もあった。

話題が外国の研究者の研究活動に及ぶや、その頃精力的に研究活動され、業績を印刷発表していたアメリ

カの某研究者の研究論文について「ラテン語の記載は誰々に、写真は誰々に、図は誰々に感謝する等記載しているが、自分は何をするのかね」と皮肉ったものでした。しかし何でも一人で行う当時の日本の研究者が及ばなかったのは、アメリカナイズされた研究論文の発表に際しての分業化といった研究手法に理解の少なかった為でもあった。

先生の偉大な足跡は、全世界に及ぶことで、昭和46年夏にバンクーバーのUBCで開かれた学会に出席した私は、Prof. Scagelやその他の学者から「Dr. 山田の後は誰だ」と聞かれたが、この意味は「日本の藻類研究のリーダー」を言われたのか、「教授のポスト」のことか一瞬戸惑ったものであった。それほど先生はこの世界の頂点に立っておられたのだという感を深くした。職場が近かったせいもあり、私ほど足しげく先生をお訪ねし、ご教示を公私にわたり頂いた者も少ないのではないかと、その幸運を喜んだものである。先生のご生誕百年に際して、永かったご指導の中で、まだまだ書き足りないことが沢山あるが、またの機会があるとすればその時に譲りたいと思う。

(061-2271 札幌市南区藤野一条七丁目22-12)

千原 光雄：山田幸男先生

プロローグ

「Sapporo から来たのか、Professor Yamada のところからか？」が1960年代初頭に初めて渡米した私が行く先々の藻学者たちにまず問われた言葉であった。その都度、「No！ そうではないのだ。しかし、Professor Yamada の講義は聞いた」と答えたことを今でも思い出す。学部がどこを出たかはさ程の問題でなく、どこで大学院で学んだか、そして誰に学位をもらったかが、ここアメリカの学界では大きな関心事であることがしばしば滞在して大学院制度を理解するに及んでよくわかった。それはともかく、いかに山田幸男先生の名が国際的に知られているか、いかに先生の名声が高いかを、渡米早々改めて再認識することとなった。

山田先生の臨海実習

山田幸男先生に初めてお会いしたのは1951年春、東京大学理学部の講義室であった。ここへ至るまでには若干の経緯がある。当時、私は東京文理科大学の3年生（旧制の大学は3年制であった）で海藻の研究を目指していた。それより1年程前、私は恩師三輪知雄先生の指導で管状緑藻の細胞壁主要構成物質の研究を始めた。緑藻の細胞壁の主要構成糖は、高等植物ではほとんど例外なくセルロースであるのと対照的に、グループによって違っているようだ。糖質の分析方法や研究の方法を身につけるには管状緑藻は良い材料であり、その研究結果は管状緑藻の分類や系統を考える際に貴重なデータを提供するだろう。といった趣旨のこ